
食事の秘密

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

食事の秘密

【Nコード】

N3206R

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

西ベルリンでは食事により市民の士気が異常に高まっているという。その秘密を確かめに潜入したシュナイダー中尉が味わったものは。実際に東西ドイツではこの分野でも驚くまでに差がついていたそうです。

第一章

食事の秘密

統一される前のドイツである。

その一方のドイツである東ドイツの首都東ベルリンのあるビルの中でだ。彼等が話をしていた。

「それではだ」

「はい」

スマートな長身の男が自分の前に座っている鼻の高い男に応えた。まるで映画俳優の如き整った顔をしている。彫の深い顔立ちに青く澄んだ瞳、そして見事な金髪を後ろに撫で付けている。スーツも端整に着こなしている。

その彼がだ。その鼻の高い男の言葉に応えたのである。

「君はこれから西ベルリンに入ってもらおう」

「そしてですね」

「そうだ、西側の情報を集めてもらいたい」

これが彼に告げられた言葉だった。

「よいな、同志ヘルバルト」シユナイダー中尉」

「わかりました、同志アルベルト」メルカツツ中佐」

お互いにこう呼び合うのだった。

「私は情報収集だけなのですか」

「そうだ、君はそれだけでいい」

メルカツツはこうシユナイダーに述べるのであった。

「特に工作はしなくてもいい」

「左様ですか」

「それも情報収集についてもだ」

「についてもですか」

「そうだ、食事についてだ」

それだというのだった。

「最近西側で食事に何かをしているらしい」
「何かとは」

「わからない。だがその食事を食べてだ」
「どうなるかもだ。メルカッツは話すのだった。」

「かなり士気が高まっているらしい」

「将兵のですね」

「いや、将兵だけではなく」

「といいますと」

「人民達もだ」

市民とは言わないのがまさに東側である。共産圏特有の言葉だ。

「それを食べてだ。士気をあげているらしい」

「そしてそれによって働きですか」

「かなり国力をあげているようだ」

「妙な話ですね」

それを利いてだった。シュナイダーは言うのだった。

「確かに食事により英気は養えますが」

「そうだ。それで君は西ベルリンに入りだ」

「食事について調べよと」

「そうしてくれ」

メルカッツはまた言った。

「ではな」

「はい、わかりました」

シュナイダーは敬礼をして応えた。端正できびきびとした動作だった。

「そうさせてもらいます」

「頼んだぞ。今回の仕事は危険は少ないがだ」

「それでもですね」

「重要な任務だ。敵の士気に関わることだからな」

「はい、それでは」

こうしてだった。シュナイダーは身分を偽って西ベルリンに潜伏

した。実は西ベルリンに入るのははじめてだ。これまでは東側の中だけでの任務ばかりだったのだ。

その西ベルリンに入るとだ。彼がまず見たものは、「何だここは」

街の中を見てだ。呆然となるしかなかった。

立ち並ぶ高層ビルに行き交う数えきれないまでの見事な車、それに派手な服を着た人々。それを見ては彼が今までいた東ベルリンはまさに古ぼけた一枚の写真であった。

「資本主義の害毒か、これは」

誰にも聞こえないようにして呟いた言葉だった。そしてだ。

街を歩いているとだ。謎の一团に出会った。

黒いブルゾンに同じ色のレザーパンツ、そして背中には何か得体の知れない大きなケースを背負っている。そして髪型は。

オレンジのモヒカン右が赤で左が黄色の長い髪、青い長髪に狼の如き銀色の髪。鼻や耳にピアス、おまけに化粧物の如きメイクをしている。彼はその一团を見て思わず身構えてしまった。

「人間か！？貴様等は」

「おいおい、この兄ちゃん何か言ってるぜ」

「あんたまさかへビメタ知らないのか？」

「何処の田舎から来たんだよ」

彼等はその身構えたシュナイダーを見て笑うのだった。

「まあ俺達は泣く子も黙るゴルトリッターだがな」

「今やドイツで一番のへビメタバンド」

「その姿見て驚くのもな」

「無理はないな」

「ゴルトリッター！？」

その名前を聞いてだ。彼はいぶかしむ顔で述べた。

第二章

「何だ、その名前は」

「だから俺達のグループ名だよ」

「知らないのか？それは」

「あんた本当にドイツ人か？」

「そ、そうだ」

戸惑いながら答える彼だった。

「ミュンヘンから来た」

一応ミュンヘン訛り、スパイ養成学校で学んだそれを使って話した。

「そこからだが」

「おいおい、ミュンヘンで何度もコンサートしたけれどな」

「なあ」

「それで知らないって」

「あんたもぐりだろ」

「もぐり？」

今度はその言葉にいぶかしむシュナイダーだった。

「何だその言葉は」

「いや、そう言われるとな」

「俺達もどう言えばいいかわからないんだがな」

「ちよつとな」

「うっん、参った兄ちゃんだな」

「とにかくだ。君達はヘビメタなんだな」

シュナイダーはとりあえずそのことを確かめた。

「そうした集まりか」

「ああ、そうだよ」

「それが俺達の音楽だよ」

「わかっていておいてくれよ」

笑顔で話す彼だった。そうしてだった。

彼等はだ。シュナイダーを囲んで言うのだった。

「あんた仕事は？」

「何やってんだよ、一体」

「それで」

「タクシーの運転手だ」

そういう名目で潜り込んでいるのである。実際はタクシーにすら乗っていない。

「今日は休日だ」

「タクシーの運ちゃんねえ」

「あまりそうは見えないけれどな」

「何か銀行員に見えるな」

「そんな感じだよな」

「しかしそうだ」

あくまでそういうことにする彼だった。

「わかったな」

「一応わかったよ。まあな」

「しかし俺達を知らないなんてな」

「悲しいぜ、おい」

「あまり悲しいからちよつと来てくれ」

「何だ？」

今度は内心身構える彼だった。このまま何処かに連れられてそしてスーツの内ポケットをその上からさすった。そこには銃がある。

「一体」

「飯おごつてやるよ」

「ついでに俺達の雑誌もやるから」

「来てくれよ」

「とりあえずはレストランな」

「レストランか」

シュナイダーはそれを聞いて自身の任務を思い出した。そしてな

のだった。

そのゴルトリッターというヘビメタバンドと一緒にある店に入った。やたらと目立つ赤や青のネオンの看板の店であった。

そこに入るとだ。これまた派手な内装だった。

髑髏が飾られ緑の蔦がある。妙に暗くなっていてそれでいて不思議な魅力があった。

その店に入るとだ。ゴルトリッターの面々が言ってきた。

「じゃあ適当な場所に座ってな」

「食おうぜ」

「ここの飯って安くて美味いんだよ」

「お化け屋敷か、ここは」

シュナイダーは子供の頃に時々遊んだそこを思い出した。

「そうなのか？」

「お化け屋敷って」

「ここがか」

「言うねえ、あんた」

「面白いジョークだよ」

ゴルトリッターの面々はだ。シュナイダーのその言葉に思わず吹き出した。そしてだった。

第三章

彼等はあらためてシュナイダーに話した。

「ドイツ人はジョークが弱いけれどな」

「あんた素質あるよ」

「だよな。今のジョークは最高だよ」

「見事なものだよ」

「いや、私は別に」

気付かないうちに将校の言葉になっていた。タクシーの運転手のそれではなくなっていた。

「ジョークなぞ言っただつてもりは」

「ないのか？」

「それって」

「おいおい、ここでもまた言うのかよ」

「続けるねえ」

しかしだった。ここでまた言う彼等だった。

「まあとにかくな」

「いいか？」

「食おうか？料理な」

「ここの飯は美味いんだよ」

「そうなのか」

それを聞いても今一つこの場の雰囲気が変わらないシュナイダーだった。しかしそんな話をしている間にであった。

彼等の席に料理が来た。それは。

「んっ！？ソーセイジか」

「ああ、そうだよ」

「それにハンバーグだよ」

「それにジャガイモを煮てバターを乗せてな」

「それにザワークラフト」

「ビールもあるぜ」

そういった一連の食事だった。しかしだ。

何かとスパイスや他の食材もあった。マカロニのグラタンも傍にあればキャベツのサラダもある。サラダにはドレッシングがかかれソーセージにはケチャップとマスタードだ。ハンバーグの上には目玉焼きである。

しかもその量も大きさも半端なものではない。少なくともシュナイダーがこれまで食べてきた東ドイツの食事とは全く違っていたのだ。

パンもある。ところがこのパンがだ。

「何だ、これは」

「パンだぜ」

「見ればわかるだろ」

「ライスに見えるか？」

「いや、見えない」

生真面目な調子で答える。そのパンを驚いた目で見て触りながらだ。

触ってみるとだ。そのパンはだ。

「柔らかいな」

「そういうパンだからな」

「固いパンだってあるけれどな」

「フランスパンもあるけれど頼むかい？」

「フランスパンだと」

それを聞いてまた驚くシュナイダーだった。

「そんな贅沢なパンまでここでは食べられるのか」

「……今のもジョークだよな」

「あんた今のジョークだよな」

ゴルトリッターの面々はシュナイダーの今の言葉には面食らった顔になった。

「一応聞くけれどな」

「そうだよな」

「ジョーク？ああ、そうだな」

ここで実はスパイである自分を思い出してだ。演技に戻るのだった。

「そうだ、今のはジョークだ」

「だったらいいけれどな」

「フランスパンが贅沢ってな」

「そんなの何処でも変えるしな」

「パン屋に行けばな」

「そうだよな」

これが西ドイツである。しかし東ドイツでは違うのだった。今目になっているパンにしてもだった。

「こんなに白くて柔らかくて。こんなパンが普通に食べられるのか」

「あんだ、ひよつとして貧乏だったのか？」

「ミュンヘンで苦労してたんだな」

「それも相当な」

彼の驚きを前にしてこう考えたゴルトリッターの面々だった。

「うつむ、じゃあどんどん食ってくれ」

「ここの飯は美味いしな」

「どんどん食ってくれ」

「いいな」

「食べていいのだな」

シュナイダーは真顔で彼等に返した。

第四章

「ではだ。早速だ」

「ああ、じゃあな」

「食おうぜ」

何はともあれだった。レストランは食べる場所だ。それで彼等は食べるのだった。

ゴルトリッターの面々はそれぞれ無造作に食べはじめる。それに対してシュナイダーは丁寧で無駄のないマナーで食べはじめる。何気にタクシーの運転手にしては上品だったがゴルトリッターの面々は気付かない。

重要なのはだ。これだった。

シュナイダーはまずザワークラフトを食べた。すると。

「むっ、これは」

「どうだい、ここのザワークラフトは」

「中々のものだろ」

「美味い」

食べるとだった。その目が光るのだった。

「こんなに美味いザワークラフトははじめてだ」

「そうだろ？ここのは美味いだろ」

「そうだろ」

「こんなザワークラフトが普通に食べられるのか」

このことに驚くことを隠せないのだった。

「そうなのか」

「ザワークラフトだけじゃないからな」

「ソーセージも食ってみたらいいさ」

「ハンバーグだってな」

「う、うむ」

シュナイダーはゴルトリッターの面々の言葉に頷く。そうしてそ

のソーセイジやハンバーグ、それにサラダやマカロニグラタンも食べてみるとだ。

「何もかもがだ。彼がはじめて食べる味であった。」

「胡椒をふんだんに使っていてそれにマスタードの質もいいな」

「だろ？味付けが絶品なんだよ」

「それに肉だつていいの使ってるしな」

「肉も野菜もだな。それに」

「ジャガイモやそういつたものも食べてみるとだ。」

「バターまでいい。ミルクも。それに」

「そうだろ？」

「それにだよ」

「料理の腕もいいな」

「それもなのだった。」

「最高級のレストランなのか、ここは」

「いいや、普通のレストランだぜ」

「もう何処にでもあるな」

「そんな店だけれどな」

「なあ」

「これがゴルトリッターの面々の言葉だった。」

「それはちよつと大袈裟だよな」

「確かにこの店美味いけれどな」

「こうした店つて西ベルリンには何処にでもあるよな」

「そうだよな」

「こんな美味しいものを出せる店が何処にでもあるのか」

「これまたシュナイダーにとっては驚きのことだった。目玉焼き」とハンバーグを切つてそれをフォークで口の中に入れながらだ。彼は言うのだった。

「恐ろしい話だ」

「だからジョークだよな」

「いい加減マジにしか聞こえないけれどな」

「うっん、あんた天然とかじゃないよな」

「まさかと思うけれどな」

「どうなんだ、その辺り」

彼等はシュナイダーにいい加減不安なものを感じていた。だが怪しんではいなかった。

しかしそれでもだ。彼等はシュナイダーに話し続ける。

「まあとにかくな」

「いいか？」

「デザートな」

「それも食うよな」

「デザートか」

シュナイダーはそれを聞いてだ。また考える顔になった。

そしてそのうえでだ。彼は話すのだった。

「そこまであるのか」

「もうそれを食わないと終わらないよな」

「あれだぜ？イタリア人ならジェラートを食べないと収まらないしな」

「俺達ドイツ人だってそこは負けられないからな」

「だからいいな」

「デザートか。そういえば」

シュナイダーはそれを聞いて腕を組んで深刻な顔になって話した。

「フルコースの最後になって出るものだが」

「そんなご大層なものじゃないしな」

「普通だよ、普通」

「なあ」

「そんなものか。とにかくだ」

とりあえずデザートが出ることはわかった。そして次の関心はだ。

第五章

「そのデザートは何なのだ」

「そうだな、あれがいいよな」

「ああ、あれな」

「バナナとアイスクリームのクレープな」

「あれにしような」

「バナナ……」

バナナと聞いてだ。シュナイダーはここまでで最も驚いたのだ。た。

そのうえでだ。ゴルトリッターの面々に話すのだった。

「バナナが出るのか、嘘ではないのか」

「おいおい、あんた実はあれじゃないのか？」

「タイムスリップしてきたのか？」

「大昔にいてそれで今の時代に来てな」

「バナナが高かった時代からな」

「来たんじゃないのか」

「あつ、いやそれは」

シュナイダーは彼等のいぶかしむ言葉に我に返ってだ。慌ててその取り繕うことにした。そうしてそのうえでなのだった。

「実は私は」

「ああ、あんたは」

「どうしたんだ？」

「それで」

「バナナが大好きなのだ」

頭の中で考えてからこう答えた。

「それで出て来たことがだ」

「嬉しくてか」

「それで言っただんな」

「つまりは」

「そうなのだ、実はだ」

こういうことにしたのだった。

「嬉しくてな。そうか、バナナが出るのか」

「ああ、この店のそれは凄いぜ」

「でかくて甘くてな」

「新鮮でな」

「美味いからな」

そのバナナの味まで語られる。

「じゃあ最後にそれ食ってな」

「それで終わりにしような」

「それじゃあな」

「わかった。ではな」

こうして彼はそのバナナを食べたのであった。

食べてみるとだ。信じられないまでの美味さだった。彼にとっては。

実はバナナを食べたことがなかったのだ。東側ではバナナは最高級品だったのだ。将校である彼も食べられないようなものであるのだ。

だからこそ食べてみて驚いた。その美味さにだ。

アイスクリームもクレープもだ。信じられないまでに甘く美味でだ。舌がとろけるまでだった。

「美味い………」

泣きそうな顔で言葉を漏らした。

「ここまで美味いとは」

「あんた本当に大袈裟だよ」

「そうだよ、確かにこの店は美味いけれどな」

「幾ら何でもな」

「なあ」

「いや、本当に美味しい」

デザートを食べ終えてからまた言う彼だった。

「ここまでとは」

「そんなにバナナが好きだったんだな」

「成程なあ」

「そうだったんだな」

ゴルトリッターの面々はこう考えたのだった。

「いや、それだったらな」

「もっと食うか？」

「そうするか？」

「いや、それはいい」

これは断るシュナイダーだった。そしてだ。

彼は今はコーヒーを飲んでいた。その味もだ。

普段東側で飲んでいる代用コーヒーとは全く別物だった。本物の
コーヒーはまさに地獄の様に熱く絶望の様に黒く天使の様に甘い。

タレーランの言葉通りだった。

それが実に安く飲める。シュナイダーにとってはこのことも夢そ
のものだった。

その夢を飲みながらだ。彼はゴルトリッターの面々に答えていた
のだ。

「満腹だ」

「そうか、それじゃあな」

「俺達これから収録があるからな」

「じゃあこれでな」

「また会おうな」

こうして彼等とは別れた。しかしシュナイダーにとっては信じら
れない時間だった。

第六章

その余韻に浸りながら西ベルリンを歩く。すると今度は。売店にだ。信じられないものを見たのだった。

「ガムだと?」

「んっ、あんたガム欲しいのかい?」

「こんなものが普通に売っているのか」

「ああ、新製品だよ」

売店の親父は何でもないといった調子で彼に返す。

「苺味だよ」

「苺味のガムか」

「ああ、そうさ。いるかい?」

「買いたい。では幾らだ」

「はい、これだけ」

親父が指し示した書かれている値段を見てだ。シュナイダーは飛び上らんばかりに驚いた。東側ではガムもなかったのである。

「これだけだよ」

「安いな」

「高いガムなんてあるのかい?」

「ないのか?」

「ガムだよ」

親父は素っ気無く述べてきた。

「ガムが高いのかい?」

「安いのか」

「そうだよ、安いよ」

また述べる親父だった。

「子供が普通に小遣いで買うものだから」

「子供が普通にか」

「そうだよ。それで買うのかい?どうするんだい?」

「買う」

すぐに答えた彼だった。

「買わせてもらう。是非な」

「あいよ。それじゃあね」

「うむ」

こうしてガムを買って早速紙を破り赤紫のそれを口の中に入れる。するとだ。

「甘い……」

ガムの柔らかいくちやくちやした感覚と口全体に広がる甘さには病みつきになった。それは彼が今まで味わったことのないものだった。

その甘さに病みつきになってだ。それから毎日ガムを噛む。そしてだ。

その他にも西ベルリン中のありとあらゆるレストランに入った。そうして食べ続けてだった。

「ドイツ料理だけでないのか」

このことにも驚く彼だった。

「フランス料理もある、イタリア料理もスペイン料理もだ」

こうした欧州の料理が一通り揃っていたのだ。

「ハンバーガーもあれば中華料理も。それに」

そしてだ。彼が今入っている店はだ。

独特の木造建築にそれに彼もその名前と存在は知っているが全く読めない文字があちこちにある店であった。そしてそこで彫の浅い黒い髪の店員と話していた。

「はい、それでは」

「この刺身か」

「そうですね」

「これは何なのだ」

その店員に真顔で尋ねる。店員は変わった形のエプロンにボタンがなく袖の広い服を着ている。その店員に対して尋ねているのだっ

た。

「刺身というのは」

「生のお魚です」

「生のだと」

「はい、御存知でしたか」

「そういえば日本では」

ここで彼は東ドイツで習った日本の文化や風習を思い出した。

「生の魚を独自のソースで食べるそうだな」

「お醤油のことですね」

「醤油？」

「はい、そのソースはそれですね」

こう話すのだった。

「よく言われているのでわかります」

「醤油か」

「大豆で作る醤油ですね」

「何っ、豆からソースを作るのか」

これを聞いて目が飛び出んばかりに驚くシュナイダーだった。

「日本人は手先が器用と聞いていたがそんな芸当ができるのか」

「日本では昔からそうして食べていますが」

「恐ろしい話だ」

思わず失礼なことを言ってしまったシュナイダーだった。だが自分では気付いていない。

「日本人というのは」

「よく言われます」

しかし日本人の店員は平気な顔である。

第七章

「ではどうされますか」

「どうされるかとは」

「そのお刺身を注文されますか」

冷静な顔でシュナイダーに問うてきた。

「そうされますか」

「うっむ、そうだな」

問われて考える顔になってだ。それから答えるのだった。

「ではそれとだ」

「はい、それですね」

「他に何かいいものはあるか」

「お豆腐に湯葉はどうでしょうか」

「豆腐？確か大豆の加工品だな」

「はい、湯葉も同じです」

「身体によくて美味と聞いている。それではだ」

どうするか。彼はまた決めたのだった。

「その二つも貰おう」

「わかりました」

「そして他に勧めるものはあるか」

「天麩羅ですね。それとお味噌汁と」

「味噌スープか」

「それです。それもどうですか」

「わかった。ではそれも貰おう」

シュナイダーはすぐに頷く。そうして白米も頼んだ。そのうえで和食を食べてみるのだった。そしてその味はどうかというのだった。

「うっ、これは」

まずは刺身を食べた。それは。

醤油に漬けるがそこには緑っぽい色の香辛料もあった。その瞬時

に来る辛さにまずは戸惑った。鼻につんとくるその感覚にだ。

涙が出そうになる。しかしそれは一瞬だった。

それが終わってからだ。味わったものは。

「何と、日本人はこんなものを食べているのか」

「はい、そうです」

「素晴らしい」

感嘆の言葉だった。そのぷりぷりとした感触と新鮮な味覚にだ。

彼ははじめて味わうものを楽しむことになった。

天麩羅のかりっとした歯ざわりとそしてその中にある海老や烏賊、茄子もだった。その味もまた食べると忘れられないものがあつた。

豆腐の柔らかさも湯葉も上品さもだ。彼は目を見張りながら味わつた。そしてであつた。

味噌汁はだ。飲んでから言うのだった。

「あつさりとしていてしかも味わいが深いな」

「御気に召されましたか」

「うむ」

その通りだと店員に答える。そして言うのだった。

「中のこの黒いものは」

「若布です」

「若布？」

「海草です」

店員はそれだというのだ。

「それなのですが」

「そうか、これもいいな」

他には四角く小さく切つた豆腐もある。しかし今はそれよりも若布だった。

若布のその適度に固く弾力のある歯ざわりに彼は素晴らしいものを感じていた。その感じるものをそのままに話す彼であつた。

「日本人は海草まで食べるのか」

「ドイツではないんですね」

「そうだ、ない」

そもそも海草を食べることすら知らなかったのである。

「だが食べてみればだ」

「御気に召されましたか」

「素晴らしい」

実際にそうだとしたのであった。

「いや、何もかもが」

「御飯はどうでしょうか」

「ライスはドイツでも食べるがだ」

だが野菜としてだ。主食としてではない。

それを食べるとだった。この味もまた。

「主食として食べるとやはり違うな」

「左様ですか」

「うむ、違う」

このこともわかった。

「しかも柔らかくてだ。いい御飯だな」

「ササニシキです」

「ササニシキ？」

「日本で開発されたお米です」

店員はシュナイダーにこのことも話した。

第八章

「当店ではそれを出しています」

「そうだったのか」

「それで如何ですか」

「美味い」

今度の言葉は一言だった。

「ここまでの味とはな」

「これも御気に召されましたね」

「うむ」

「それでデザートは」

「それも日本のものだな」

「はい、そうです」

そうだとしたのであった。

「饅頭ですが」

「中華料理にもあったな」

「そうですね。ただ違うのは」

「肉が入っているのが中国の饅頭だったが」

「日本では餡が入っています」

「餡とは!？」

「小豆を潰したもので。あつ、小豆とは小さい黒い甘い豆で」

「豆からデザートを作るのか」

これもまたシュナイダーには驚くべきことだった。甘さとは砂糖や蜂蜜、そして果物から採るものだと思っていたからだ。東ドイツの常識から考えていたのだ。

「それはまた」

「ドイツではありませんよね」

「はじめて聞いた」

実際にこう言う彼だった。

「そんな話はな」

「やはりそうですか」

「うむ、そしてだが」

「そのデザートで宜しいですね」

「あと緑茶だったな」

「これも知っている彼だった。」

「緑茶というものもあつたな」

「はい、最後の飲み物はそれにされますね」

「うむ、一度飲んでみたい」

「シュナイダーは店員にはっきりと述べた。」

「それではな」

「はい、それではお饅頭と緑茶を」

「頼む」

こうして最後はその二つにしたのだった。そして出て来たのは。

草色の小さな丸いもちもちとした感じの饅頭が二つに見事なまでに緑の色をしたお茶の二つだった。その二つが彼の前に出されたのだった。

「どつぞ」

「うむ」

店員に伝えてから食べる。するとだった。

草色の饅頭のその粘りがあり歯に抵抗を見せる歯触りの奥にある甘さはだ。落ち着いてあまり自己主張しない。しかし柔らかくしつとりとくる甘さを味あわせてくれるものだった。

その甘さも彼がはじめて味わうものだった。その優しい甘さに親しみを感じずにはいられなかった。そしてその次の緑茶もだった。

飲んでみると渋い。だが口を清らかにしてくれるのだった。その落ち着くものを味わいだ。彼は満足して店員に対して言うのだった。

「素晴らしいな」

「御気に召されましたか」

「日本人は幸せだな」

そしてこう言うのだった。

「こんなものをいつも食べているとはな」

「流石に刺身や天麩羅はちよつとした贅沢なものですが」

「それでも食べているのだな」

「はい、勿論お饅頭も」

「羨ましい限りだ」

心から思っている言葉だった。

「味噌汁も豆腐もよかった」

「そう言つて頂けて何よりです」

「そして」

そのうえでだった。彼はこうも言うのだった。

「こうしたものを食べられる西ベルリンの物達もな」

「んっ？何か？」

「あつ、何でもない」

今の言葉は取り消した。店員は外国人だった。だから彼の今の言葉でスパイであるということはわからなかったのだ。彼にとって幸いなことに。

「それはな」

「左様ですか」

「そうだ。ではな」

「はい、またのご来店をお待ちしております」

「うむ」

こう話してだった。彼は日本料理店を後にしたのだった。

第九章

そしてそれからもだった。彼は西ベルリンの様々な店を食べ歩いた。そうしている間に健康になり心も機嫌よくなっていた。美味しいものを食べてだった。

東ベルリンに戻ってそれを上官であるメルカッツに報告する。すると彼も驚いて言うのだった。

「何と、美味しいもののせいか」

「はい、そうです」

その通りだと報告するシュナイダーだった。

「そのせいで、です」

「美味しいものか。西側はそんなに美味しいものに溢れているのか」

「驚くまでに」

「しかもドイツ料理だけではないのだな」

「はい」

「他の国の料理もか」

「バナナやガムも驚く程安いです」

このことも話すのだった。

「ですから」

「バナナやガムのことは聞いていたが」

「安いです。そして新鮮で美味しいです」

「そうしたものをいつも食べているからか」

「はい、西側は活気に満ちています」

これがシュナイダーの出した結論だった。

「それによつてです」

「そうなのか。それでか」

「はい、それに対して我々の食事は」

翻つてだ。シュナイダーは彼等の祖国の国の食事について話すのだった。

「あまりにもです」

「そうなのか。そこまでだな」

「どうやらこれでは」

「これでは？」

「いえ、何もありません」

西側に敗れるという言葉は言わなかった。言えばどうなってしまうのか、東ドイツでは考えるまでもなかった。何しろこの国は共産主義国家の中で最優等生とされていてソ連が最も信頼するパートナーにさえなっている国だからだ。それだけに言論統制やそういったものは完璧だったのだ。ナチス時代からのその技術は徹底したものだ。

それで言うのを止めてだ。報告を終えたのだった。しかしそれから暫くしてだった。共産圏は崩壊し東ドイツは西ドイツに吸収される形でドイツが統一されたのだった。

悪名高きベルリンの壁がなくなりブランデンブルグ門が開かれた。東西のベルリンも一つになった。メルカッツとシュナイダーはその能力を買われ統一されたドイツ軍に入隊した。そしてベルリンで諜報機関のスタッフとして勤務していた。

今はメルカッツもシュナイダーと共に旧西ベルリンの様々なレストランを食べ歩いている。そうして美味しいものを楽しんでいた。

しかしなのだった。二人は。

見事なまでに肥満していた。あの逞しく引き締まった姿は何処にもなかった。成人病になっただけでもおかしくはないまでに太った姿でだ。今日はイタリア料理店でスパゲティを食べている。

トマトと茄子、それに唐辛子とガーリックのソースで赤くなったパスタはアルデンテで実に美味い。何よりもオリーブを多量に使っていて絶品である。それを食べながらだった。

メルカッツが言うのだった。

「いや、イタリアはだ」

「好きですか」

「大好きだ。とりわけこれだ」

「パスタですね」

「何だ、この美味さは」

メルカッツはこうまで言う。

「どの店のパスタもだ。絶品ではないか」

「そういえば大佐は」

「うむ」

階級があがっていた。彼は大佐になりシュナイダーは少佐になっていたのだ。流石に将官になるのは難しくメルカッツは大佐で足踏み状態になっている。だが将官になれる日も近いとも言われていた。

「このところ三日に一回はですね」

「パスタを食べているな」

「好きですね」

「西側のパスタは神の食べ物だ」

絶賛そのものだった。

「それにワインもだ」

「ええ、それにドイツ料理も」

「ビールもだしな」

メルカッツはビールについても話した。

第十章

「西側のビールはな」

「はい、まさに黄金の酒です」

「東側にあつたものとは全く違う」

「こう言うのであつた。」

「まるで違う飲み物だ」

「全くですね。何もかもが」

「私は実はだ」

メルカッツは自分のことも話す。そのパスタを食べながらだ。

「あれなのだ。イタリアが好きなのだ」

「そうなのですか。実は私もです」

「君もか」

「そしてパスタもです」

「それもだというのだった。」

「大佐程ではありませんが」

「それでもか」

「はい、しかしあまりにも美味で」

「そうだな、東側にもパスタはあつたがな」

それはあつたというのだ。しかし、とも話されるがだ。

「やはり味はな」

「このパスタとは比べ物になりませんね」

「つつい食へ過ぎてだ」

「そうですね。他の食べ物と一緒に」

「今ではこの有様だ」

丸々と太りしかも顔は油ぎっている。かつての精悍さは見る影もない。

「この前の健康検査だが」

「まさかとは思いますが」

「肥満だけではなかった」

それに止まらないというのだった。

「痛風の危険もあるらしい」

「ビールのせいですね」

「飲み過ぎだな」

「そうですね。私も最近足の親指が気になります」

痛風になればまず足の親指に激痛が走る。だからだというのだ。

「西側ではです。その痛風がです」

「国民病だったな」

「はい、ですから」

「我々もその危険を感じるようになってきたか」

「東側ではそんな心配なぞなかったというのに」

「あれだな」

メルカツツは苦笑いと共にこう言った。

「美味しいものを食べると心が弾み健康にもなるが」

「食べ過ぎればですね」

「かえって健康によくない」

「そうですね。肥満に痛風に」

「そういうことだな。見ればだ」

メルカツツは店の中も見回す。するとだった。

妙に頭が眩しい男が多い。かなり目立っている。それを見てだった。

「西側にあつたのはネオンの灯りだけではないな」

「ええ。天然の灯りも豊富です」

「ビールとソーセージのせいだと思うがどうだ」

「それしかないかと。どうも統一してから東側も灯りが増えました」

無論ネオンだけではない。その天然のものもだ。

「どうやら我々はです」

「統一されて深刻な悩みとも向かい合うことになったな」

こんなことも言うがだった。結局食事を楽しむ彼等だった。東側

にはなかったもの、だが今はそれを思う存分楽しめるようになったのだ。成人病等の不安も一緒に抱え込みながらにしても。

食事の秘密

完

2010・11・29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3206r/>

食事の秘密

2011年3月2日22時10分発行